

## 第3回 第2次清瀬市教育総合計画マスター プラン検討委員会会議録(要旨)

日 時 平成 28 年 2 月 23 日(金) 午前 10 時～12 時

場 所 健康センター第1会議室

出席者 委員 16 名(中田委員長 村田副委員長 島澤委員 佐藤委員 福島委員  
齊藤(し)委員 菊地委員 矢澤委員 和田委員 林委員 広瀬委員  
西澤委員 中西委員 内野委員 小苅米委員 齊藤(隆)委員)  
その他7名(教育部長 教育部参事 生涯学習スポーツ課長 図書館長 郷土博物館長 統括指導主事)

欠席者 1 名(土田委員)

会議次第

1 開会

2 議題

- (1)柱立ての素案について
- (2)施策の方向性について

3 事務連絡

4 閉会

会議(要旨)

1 開会

2 議題

(1)柱立ての素案について

(教育総務課長)

資料説明

(委員長)

前回のまとめとして事務局案として7つのフレーズが提案された。最終的に7つは多いので、5つくらいにしていきたい。資料についての質問があるか。

(委員)

事務局提示案の学校が自信を持ちという表現は非常にネガティブな表現なので変えた方が良い。

(教育総務課)

委員からの意見をまとめたが、これを第1次マスタープランの5本の柱で参考に分類しただけであって、これは継承していくものではない。

(委員長)

現行のフェーズ2の表現に合わせたらどうなるかということか。

委員からの指摘は、学校をどういう存在にとらえるかという事。ネガティブな存在と捉えるのではなくて、もっとポジティブな存在として捉えていった方がいいのではないかという指摘。重要な意見として受け止めていただきたい。

(委員)

第1次マスタープランの5つの柱は踏襲しないのか？

(委員長)

踏襲はしない。一部引用する可能性があるかもしれないが踏襲はしない。

(委員)

今後の話し合いで新たにフェーズ2を導き出していくので、先ほどの委員の意見に対しての心配はない。

(委員)

分野が3つに分かれているが、この分野は3つと決まっているのか。

(教育総務課長)

事務局なりに・学校教育分野・生涯学習分野・地域とのつながりというように参考までに分けただけ。

(委員)

自分なりに5つに分けて、学校・家庭・地域・情報・地元の文化に分けるとフェーズになるのではないか。

(委員長)

行政では枠組みもあるので、そのあたりを意識して出していると思う。

(委員)

基礎基本の徹底という事で当たり前のことができる子供たちを育てようというのが伝統的な清瀬の教育。基本的生活習慣は理念としていたほうがいい。学びの循環を強調した方が良い。学校教育・社会教育・生涯学習は一つの学びの循環になっているんだということを強調すると、清瀬市の新しい教育計画になる。学校と地域の連携というキーワードを打ち出した方がいい。近隣市と比較して清瀬市の教育計画の特徴を打ち出すには、学びの循環という捉え方、あるいは学校と地域の連携というのを特徴として打ち出していけないか。

(委員長)

今後も今のような意見を出しながら、5つにブラッシュアップし、最終的な言葉にしていくことにだろうかと思う。

今日の作業について教育総務課長から説明。

(教育総務課長)

前回はフェーズ1を教育委員会の方で貫く理念として『子供が育つ 市民が育つ まちも育つ 清瀬の教育』と提示した。今日の議論の中ではフェーズ3の各柱建てを具現化するための方向

性、7点ほど事務局案を提示した中でそれぞれの柱建てにひもづくような重要な施策について協議する。今日の会議の中ではフェーズ3についてご検討願う。

(委員長)

7つというのはフェーズ2のこと。フェーズ3についてはまだ何も提示がない。

7つの柱の先で、この柱に対して具体的に何をするかという事を示していく。フェーズ3は方向性となっているが、具体的にこういうことをやるといいということを記入してほしい。今回と次回とで施策に通じるようにしていきたい。今回は『学力を保証する学校(基礎基本の徹底と自ら学ぶ態度の育成)』と『社会とのつながり(地域で守る子供の安全)』と『自然と文化が育む郷土愛(伝統・文化の継承)』についてグループディスカッションを行う。

ディスカッションの前にそのことに対する現状と課題が必要。先ほどの3点について教育委員会的にはどういう現状認識を持っているのか担当課長にレビューしてほしい。

(教育部参事)

『学力を保証する学校(基礎基本の徹底と自ら学ぶ態度の育成)』と示している。学力を保証するといった発想は学校としては思い切った発想。このキーワードには、学力は学校教育で充たされる清瀬という言葉に大きなポイントがあると思う。保証という言葉をあえて使った。清瀬市の中学校で学んだ子供たちは一定程度の学力を身に着けることができるよう学校は教えなければいけないと思う。現状は難しく、保証の段階をどこに置くかという事によって保証できているともいえないともいえる。

一般的に客観的な手法として東京都や文部科学省が行っている学力調査というものが使われている。それを基準にすると清瀬市の中学校の学力が保証されているかというと、若干平均を下回っている部分もある。各学校に求めているのは、学力を高めていくにはどのようにしたらいいかという事。先生方の授業をより力がつくように変えていってもらうということで、研修等も行い、各学校で校内研修等も行っている。

また、わずかではあるが予算もつけて、専門の先生に入っていただきながら研究も進めている。先日今年度の研究という事で、第四小学校と第四中学校が小中連携で学力向上に関わる研究発表というのを行った。現状に基づいて授業をこう変えていたら子供たちの学力が上がっていっているであろうという考え方から各学校は工夫をし、その実行を徹底していくところが現状である。

教育委員会で行っていることの観点で行くと、この保証というところに合致するであろうというのが放課後補習教室。この放課後補習教室は小学校6年生と中学校3年生の算数と数学が苦手な子供たちに対する個々の指導という形で昨年度から行っている。もちろん見ていかなければいけないという層がこの苦手な層だけではないという事は十分承知はしているが、保証といった観点から考えるとそういう取り組みが必要だろうということで、現在この放課後補習教室に取組んでいる。

また学力の捉え自体考えると、いわゆる点数だけではないという考えがある。清瀬市で考える学力とはいったいどんなものかという事で現在学力向上戦略会議という会議を行っている。清瀬では点数だけではない学力をどうやって考えていくか、現在答申にまとめて教育長に戻しているところ。次年度以降、それを14校の学校に広げていって点数だけではない学力についても保証する学校教育についての取り組みをしていけるような仕組みをつくっていきたい。

学校教育の取り組みというのは詰めていくと学力を上げていくという事に結びついていくと思う。この柱に関わる部分については 14 校の学校の学校計画の取り組みが直結している。  
(委員長)

現状を踏まえての切実な思い。今の話を受けて我々がどう考えるかという、それぞれの立場からディスカッションしてほしい。社会とのつながりはどなたにお願いするか。

(教育総務課長)

『社会とのつながり(地域で守る子供の安全)』に関しては、特に担当の課があるというわけではない。現在の第1次マスタープランで言うと、『社会とのつながりを作るコミュニティ会議』で、市長部局の企画課の方で企画して、円卓会議を進めている。円卓会議は市内の小学校区全校に広げる取り組みを進めて計画的に地域の方々にご協力いただき、いろいろな分野の方が学校区を単位として地域の事を話し合う会議と聞いている。学校の分野との連携でいうとこの『学校支援地域本部事業』の方が学校運営を支援するというところでは連携が始まりつつあるといったところ。

また、安全推進という部分に関しては、児童生徒の安全推進というのは第1次マスタープランにもあり、これについては教育総務課で東京都の施策で通学路を保護者と警察OBの方と一緒に巡回してもらい、危険な場所を学校と子供たち、保護者が共有する。必要な個所については交通の分野であったり、警察に要請をしたりして平成 27 年度からだが、通学路に徐々に防犯カメラを設置するよう始めたところ。この分野に関して説明できるところは以上。

(郷土博物館長)

自然と文化が育む郷土愛という事で提案をしている。清瀬市には昔から伝え守られてきた伝統文化や文化財等がある。郷土芸能は先人が築いてきた市の貴重な財産であるという事から、これらを将来に渡り後世へ伝えていく事が求められている。歴史で郷土文化・文化財・郷土芸能というのは市民の連帯感を育み郷土愛を醸成していく上で重要な役割を果たしている。

現在郷土博物館では伝承スタジオで先人の知恵や昔の暮らし体験を行い郷土文化の継承を図っている。また文化財や郷土芸能については、文化財の講座等を開き、文化財の保護の啓発活動を行うとともに文化財及び郷土芸能を保存するとともに各保存会を支援していくところである。また、後継者の継承を図っているが、伝統文化だと郷土芸能を継承していくうえでの継承者が不足しているという事が現状である。

今後どのように継承者的人材育成をし、継承していくかという事が大きな課題となっている。また文化財については地域の歴史文化財をどのような形で保護していくかという事も課題になっている。現在博物館では多くの収蔵品があるが、こちらはまだデータ化になっていないので、今後資料のデータ化とシステムを構築して、広くインターネット等による資料の公開というようなこともこれから博物館の大きな課題になっている。

文化については、現在博物館では清瀬にゆかりの深い作品や芸術性の高い美術作品等の観賞会や企画展を開催している。現在も企画展を行っているがそちらの方も芸術性の高い事業等をどのような形の中で開催していくかというようなことも課題になっている。

最後に博物館のソフト面も改革が必要ではないかと考えている。現在博物館は昭和 60 年に開館し、昨年でちょうど三十年が経過した。現在専門性を持つ学芸員等配置し、基本機能である資料の収集と保管・調査・研究・展示等行っているが、31 年目という新たなステージを迎える。社会だと新ニーズも大きな変化があるので、博物館への市民参画や博学連携の新しい取り組

みやシステムを考えていかなくてはならないと考えている。これから博物館の地域での役割だと社会的な使命を考え、より多くの市民が博物館に来ていただけるような、また地域の方が博物館の活動に主体的に参加できるようなシステムを作ることも必要ではないかと考えている。その辺のシステム作りも考えていかなければいけない大きな課題と考えている。

(委員長)

今日は『学力を保証する学校(基礎基本の徹底と自ら学ぶ態度の育成)』と『社会とのつながり(地域で守る子供の安全)』と『自然と文化が育む郷土愛(伝統・文化の継承)』について議論してもらうが自由参加にしたい。それぞれ各自がバックボーンを持っているのでそれをもって参加してもらいたい。

フェーズ3の言葉を各グループ2つないし3つ出してもらう。この言葉は出にくいと思う。むしろフェーズ4に近いようなこと、ここでは何をやるといい、という事を付箋に書き出していった時にフェーズ3に該当するような言葉が見えてくる。前回同様にまず個人で時間をとるので付箋に書き出し、それをみんなで束ねていったときにフェーズ3に近いセンテンスが各チームで出てくるかと思う。

グループ討議

### 3 事務連絡

(1)検討委員会日程について

### 4 閉会

## 第2次教育総合計画マスターplan 第3回検討会における作業結果

平成28年2月23日

検討委員の皆さんに、フェーズ2の柱立てとの案して7つ示した上で、3つ(A～C)の作業グループに分かれ、各委員が考えるそれぞれの理想の姿となるための解決策をカードに記入し、3～5つにまとめる作業を行った結果を以下にまとめました。

### Aグループ

フェーズ2-2		カード記載事項
1	鉄は熱いうちに打て！	自主的取組みを推進、小学校1年生の10までの足し算・引き算の徹底、小学校1・2年生で特に遅れている生徒への特別教室、分からぬところを学校の先生に質問できる時間づくりの工夫、一定レベルに達しない子供に再テストを繰り返す、毎年生徒の結果をトレースして年度ごとの成果発表、楽しい授業・わかる授業・自ら学ぶ指導、学力発表会、1・2年生の授業の充実のため支援員・補助教育をつける、ひらがな・カタカナ・漢字を丁寧に書く、市で共通の到達レベルを決める、中1で英単語確認テスト、小1連絡帳記入指導、宿題のレベルを各クラス揃える
2	各教室の補助（特に1・2年生） 人的資源の大胆な投入 ボランティアの活用 学校支援体制の強化	やる気のない子がクラスでさわいでいる時の対応、教員の事務量の減少、英語のレベル別指導、特別な支援を要する児童を観していくための人的な補償を思い切って行う、英語の徹底教育、授業時数の確保（長期休業等の変更・給食回数増）、英語・数学の1クラス2展開授業、授業中に勉強の進行に問題を生じる生徒への対応、少人数教育、課題があり特別な指導が必要な子への対応・他の子供との繋り、学校支援（連携）の為に地域住民や青少年協・健全育成など総力で対応（学童・まなべ等）、放課後補習か授業の細分化、教諭が教育に専念できるよう事務方やSSWを整備する、1学級の定員を下げるか学級経営補助員を配置する
3	学習機会の拡大	図書館の利用、英語劇、読書会、博物館の利用、他学校訪問、小中連携、朗読の普及、魅力ある高校に学ぶ

メンバー

村田副委員長、内野委員、中西委員、和田委員、小苅米委員

### Bグループ

フェーズ2-5		カード記載事項
1	地域と教育機関との積極的なネットワーク作り	学校の行事に地域の方々も参加できる内容、誰もが安全安心に集える場所、危険な場所の周知・改善、安全な遊び場の設置（年齢ごとに変わる）、町内会・自治会のような地域の活動に気軽に参加できる
2	大人と子供が関わる・つながれる活動・社会づくり	子どものいない世帯の大人と地域の子どもの交流の場を作る、地域との輪（見守り・安全）、人と人とのつながりを持つ、あいさつができる近所との付き合い、地域の大人が教育に関して学べる場を作る、身近な地域と自分はどうのようにながっているのか、保幼小をつなげていく社会
3	大人から子供へ、子供から大人へ相互理解（お互いに思いやりの心）	思いやりの心、スマホ依存からの脱却、目標とする夢を見せていく、子育て体験、メンタル面でのトレーニング、技術（教育）を高める前に心を鍛える

メンバー

福島委員、齊藤委員、菊地委員、広瀬委員

### Cグループ

フェーズ2-7		カード記載事項
1	博物館	清瀬の価値を考える（近隣の地域との比較）、現在行っている市の行事の見直しと新規のもの、清瀬のことを学ぶふるさと講座の開催、文化財の使用体験、郷土博物館の雰囲気を温かく
2	学校	学校と郷土博物館がさらに連携できるようなシステムづくり、体験教室の在り方、保存会の方々に学校に来てもうる体験授業、子供達への郷土芸能体験学習（下宿囃子等）、学芸員による出前授業、郷土博物館と学校のオンラインシステム（資料の公開）
3	地域	知識人を知る、清瀬の歴史、清瀬の歴史教育の開催（歴史学校）、地元を歩く（何があるかを知る）、祭りへの参加、楽しい学びの場（自然文化について）世代を超えて、親子で参加できる場を作る、発表できる場所を作る、町の伝統（祭り・神輿）、長男だけ継承できるシステム（日枝神社等）
4	自然	農業体験、食（作物）、郷土料理の伝承、アドベンチャーワーク、清瀬を知る（自然・歴史・社会）、保全継承に関わる機会を作る、緑の大切さ（森・林・花の広場）、自然が多いというが畑が多いだけで入れないところが多いので足を踏み入れる所を、自然と触れ合うイベントの開催、自然を活かす（ホタル・川）

メンバー

矢澤委員、佐藤委員、西澤委員、林委員、齊藤委員、島澤委員